

「博士論文」合否査定資料

申請者
職・氏名 同志社女子大教授 風間 末起子

学位の名称 博士（英語英文学）

論文名 イギリスの第一波フェミニズムとヒロインの変遷
ーブロンテ、ハーディ、ドラブルを中心にー

審査委員 主 査 甲元 洋子

副 査 杉野 徹

副 査 福岡 忠雄

審査結果 合

2010.2.2 英語英文学専攻博士後期課程委員会 承認
2010.2.2 文学研究科博士後期課程委員会 承認

博士学位論文審査結果報告書

2010年 2月 2日

| | | |
|-------|--------|---|
| 学位申請者 | 風間 未起子 | |
| 審査委員 | 主査 | 甲元 洋子  |
| | 副査 | 杉野 徹  |
| | 副査 | 福岡 忠雄  |

同志社女子大学表象文化学部教授、風間未起子より「イギリス第一波フェミニズムとヒロインの変遷—ブロンテ、ハーディ、ドラブルを中心に—」というタイトルの論文を添えて博士の学位の申請があり、これを受けて公正に審査委員が決められ主査甲元洋子、副査杉野徹・福岡忠雄の三名が厳正な審査に当たった。

各委員は予め申請論文を十分に査読した後、2010年2月2日に公開の口頭試問会を開き申請者に対して論文内容を確認する90分にわたる試問を行った。各委員からは忌憚のない質問や意見が発せられたが、それらに対して申請者は、丁寧かつ明確に、適切な応答をした。この試問を通して、申請者の研究の確かさが十分に確認された。

申請論文において申請者は、19世紀、20世紀を代表するブロンテ、ハーディ、ドラブルという三名の大作家を取り上げ、それぞれの作品に登場するヒロインたちを文化的、歴史的な流れの中で考察し、フェミニズムの変遷を説いている。多岐にわたる様々な資料にも目を通し、先行研究を十分に咀嚼した上で、独自の見解に立脚して明快な論理を展開させた、非常に興味深い内容の論文で、高く評価できる。よって審査委員は全員一致で風間未起子の申請論文に対して、博士（英語英文学）の学位を授与するに値するという結論に達した。

博士學位論文内容要旨

2010年 2月 2日

| | | |
|-------|--------|---|
| 学位申請者 | 風間 未起子 | |
| 審査委員 | 主査 | 甲元 洋子  印 |
| | 副査 | 杉野 徹  印 |
| | 副査 | 福岡 忠雄  印 |

(要旨)

風間未起子より提出された学位申請論文「イギリスの第一波フェミニズムとヒロインの変遷—ブロンテ、ハーディ、ドラブルを中心に—」(A4ワープロ打ち249頁)は、以下のような構成(目次)になっている。

序論

第1章 第一波フェミニズムとリベラリズム

1. 総論としての主流フェミニストの性道徳
2. リベラリズムとリベラル・フェミニズム

第2章 リベラル・フェミニズムを受け継ぐヒロイン、それを超えるヒロイン

1. 1880年から1890年における「結婚」についての議論
2. *Jane Eyre* (1847) における 'ambivalence'
3. *The Millstone* (1965) における個の再構築—ポストモダン・フェミニズムという代案—

第3章 セクシュアリティとビクトリアン・ヒロイン

1. 中産階級の女性のセクシュアリティ—そのイデオロギーと現実—
2. *Villette* (1853) における自分自身の部屋
3. 'passion' (情熱) と 'Passion' (受難) — *Tess of the d'Urbervilles* (1891) を通して—

第4章 'New Woman' と 'New Morality'

1. ハーディの「新しい女」— *Jude the Obscure* (1895) の Sue —
2. 19世紀小説の're-vision'としての *The Waterfall* (1969)
3. 'New Morality'の模索—急進的ジャーナル *The Freewoman* (Nov.1911-Oct.1912)—

第5章 'empowerment' とヒロイン

1. *Shirley* (1849) における女性、自然、絆
2. *The Return of the Native* (1878) の Eustacia の創造
3. 都会の中の女性— *The Middle Ground* (1980) の試み—

結論

註

Bibliography

初出一覧

この論文は筆者の20年余にわたる研究の集大成と言うべきものである。序論において筆者は、この論文3つの目的を挙げている。①イギリス第一波フェミニズム(1840年代～1920年代)の基盤にあるリベラリズムと、その政治哲学を女性に応用したリベラル・フェミニズムの理念の概観すること。②第一波主流フェミニストであるリベラル・フェミニストの性道徳観を、同時代のフェミニストの議論や、識者や医者による女性の性についての解釈を通して調査すること。③上記2つの議論を基軸として小説のヒロインやフェミニストの変遷を、3名のイギリス人作家の小説と1本のフェミニストジャーナルを通して考察すること。第一波フェミニズムに特に注目したのは、19世紀中期以降の小説に浸透しているフェミニズムの原点を見据えておく必要があり、また、19世紀小説と20世紀の小説との近似性と相違点を明確にするためと思われる。

第1章の第1項においては、19世紀イギリスの主流フェミニストの考え方の中にある挑戦と妥協という二面性について考察がなされ、リベラリズムを標榜するがゆえに生じるジレンマを概観している。第2項では、伝統的リベラリズムの思想とその問題点、およびリベラリズムを女性に応用した19世紀のリベラル・フェミニズムの概要と問題点について基本的な分部を概要している。

第2章、第1項では、リベラル・フェミニストたちの結婚についての議論を取り上げ、伝統的な家父長制フェミニズムに反旗を翻す彼女らの要求と、そこに含まれる矛盾を詳述する。第2項では、ブロンテの代表作 *Jane Eyre* を取り上げ、ヒロインの成功物語に浸透する同時代のフェミニスト・コードを探り、ヒロインの上昇志向を温存させたまま「女らしさ」という評価も満たそうとして生じる自己矛盾を指摘する。第3項では、第2項で扱った *Jane Eyre* から120年を経て書かれた20世紀の小説、ドラブルの *The Millstone* (1965) を取り上げる。ここにもかつてジェインが悩んだ二項対立の両立という問題が継承されている。人並み以上の知力を持つヒロインは、己の妊娠・出産を通してこの問題に直面し、その葛藤の中で、以前は軽蔑していた「他者への依存」の必要性を痛感するに至るのであるが、ここに筆者は、リベラリズムが称揚する「自立」には、孤立や分断も含まれることを認識してこれを否定し、人間の相互依存に基づく個の再構築に向かうフェミニスト女性作家の姿勢を見ている。

第3章の第1項では、中産階級の女性のセクシュアリティを論じる。ビクトリア朝時代の女性たちが性の規範に影響されていたのは確かであるが、性を全面的に否定していたわけではないという事実が指摘される。セクシュアリティの隠蔽から表面化へという変化の要因を明らかにした後、続く第2項で筆者は再びブロンテの作品 *Villette* を取り上げて、この変化は小説の中に、特にヒロインの自己表現と自己抑圧の拮抗状態を通して明示されていることを論証している。ブロンテは小説の最後で、ヒロインに愛を失わせる一方で自立は達成させる。この悲喜こそが当時の女の過酷な現実であったと筆者は指摘する。第3項ではハーディの名作『テス』を取り上げる。ハーディは読者にヒロインが‘a fallen woman’ではないことを訴えようとして‘a pure woman’という副題をつけた。二分化された性の文化に意義を唱えようとしたのである。この小説の最後でヒロインは絞首刑となるが、そこに筆者は、人間の罪を購うためのキリストの磔刑との相関性を見、セクシュアリティという‘passion’と、受難の‘Passion’を巧みに重ね合わせようとするハーディの意図を読み取っている。だが、なぜ婚外の性という女性の‘passion’は受難に結び付かねばならぬのか。この問題は、ハーディの次作 *Jude the Obscure* のヒロインに引き継がれる。

第4章では2つの小説と1つのジャーナルを取り上げる。ここで問題にされる小説のヒロインや、ジャーナルの主筆マーズデンは、以前のヒロインたちが解決できなかった性の問題を乗り越えようとする気概を持ち、積極的に模索する姿を見せる。第1項で扱われるのが *Jude the Obscure* (1895) のヒロイン Sue である。ヒロインが、その急進性ゆえに直面する数々の障害に筆者は注意を喚起する。

その障害に行く手を阻まれてエロスの探求に挫折した Sue は、生きながらにして死んだ状態へと追いやられる。つまり性道徳からの逸脱に対する罰を受けたのである。しかし次の第2項で取り上げられる20世紀作家ドラブルの *The Waterfall* (1969) では、「墮ちた女」は結末で死ぬという、従来の小説の公式とも言うべき筋書きが使われない。ヒロインは従妹の夫と不倫関係にあるが、この性道徳からの逸脱に対する処罰を全く受けず、その passion は再生のシンボルとなり彼女を孤独から解放して新しい生活に向かわせるパワーとなる。作家でもあるヒロインは恋人との性愛を肯定し女の性と身体を大胆に描く。肉体を下位におく傾向を有するリベラリズムへのドラブルの挑戦を筆者は指摘し、女性が発信する新しい物語がここに提起されているとみなす。第3項では、20世紀初頭に、第一波フェミニズムやピクトリアン・ヒロインを強く意識して出版された急進的ジャーナル *The Freewoman* が取り上げられる。このジャーナルでは、主流フェミニストたちが踏み込もうとしなかった領域の問題についても活発な議論がなされた。このジャーナルは穏健なりベラル・フェミニズムに対して補完的な役割を果たしていたことになり、両者を知ることでフェミニズムの両翼を把握することができる。穏健、急進の両派に通底するのは「人権」や「個人主義」の理念であり、方法は異なるが両者の出発点と終着点は同じであったことを筆者は指摘する。

第5章では 'empowerment' という表題を冠して19世紀中期、後期、20世紀後期の3作品のヒロインたちを取り上げる。彼女らは、もはや単なる犠牲者ではなく、社会の変化を担う力を有する存在として、読者にそのパワーを指し示していると筆者は考える。第1項ではブロンテの *Shirley* (1849) を論じる。この作品では女性の自己肯定の手段として、自然や母性、また女同士の紐帯に積極的な意味が付与されているのだが、この点に筆者は、1970年代の Adrian Rich の思想との類似を見、時代を先取りして女の連帯や女性の文化継承の意味を察知していたブロンテの先見性と洞察力を指摘する。第2項ではハーディの *The Return of the Native* のヒロイン Eustacia を取り上げる。筆者は、この小説の精緻な構造美に注目しつつ Eustacia の持つ存在感を分析する。彼女はジェンダーに縛られ現実世界では持てる力を十分に揮えないまま終るが、エグドン・ヒースという土地の、いわば霊、地の女神としての圧倒的なパワーを読者に示していると筆者は解釈する。第3項ではドラブルの *The Middle Ground* を取り上げ、伝統にこだわった末にそれから離脱した作者の実験的な挑戦を明らかにする。40歳台のヒロインが中年の危機をどのようにして乗り越えたのかが、無定形、断片性、コラージュ、連鎖、多層性、視点の複数化、都会の多層性、他人との共感などのキーワードを手がかりに考察される。過去の文学作品を読み直す作業を通して、伝統から脱却し、更に自己を発展させて階層や人種、宗教、ジェンダーの境界を超越した作者の姿がヒロインの姿に重なる。ドラブルは伝統を熟知することによって新しいものを生み出す力を得たと筆者は説く。

最終章の結論では、論文全体をふり返り、イギリス第一波フェミニズムの本質的な考え方を機軸にして、19世紀から20世紀にわたる100年の流れの中で、小説に描かれたヒロインたちの呪縛、二律背反的要素、新たな生き方を俯瞰してきたこと、時代背景の中で推移し循環する小説の手法、また小説そのものの可能性の広がり示したことを再度確認している。

筆者は様々な先行研究や資料に丹念に目を通し、多角的に深く作品を読み解いている。作品あるいは作家のみを対象とするのではなく、常にその背景となっている歴史、思想、哲学なども多岐にわたって考察し、広い視野に立って精緻な研究を進めてきたことがよく解る。非常に読み応えのある刺激的で興味深い研究論文であり、博士(英語英文学)の学位を授与する資格が十分にあると判断した。

博士學位論文審査結果要旨

2010年 2月 2日

| | | |
|--|----------|---|
| 学位申請者 | 風間 未起子 | |
| 審査委員 | 主査 甲元 洋子 |  印 |
| | 副査 杉野 徹 |  |
| | 副査 福岡 忠雄 |  |
| <p>論文題名</p> <p>イギリス第一波フェミニズムとヒロインの変遷—ブロンテ、ハーディ、ドラブルを中心に— From Victorian Heroines to Postmodern Heroines : The 'First Wave' Feminist Views on Sexual Morality and Changing Women in the Novels of Brontë, Hardy and Drabble</p> | | |
| <p>(要旨)</p> <p>同志社女子大の卒業生で現在表象文化学部の教授である風間未起子から上記タイトルの論文を添えて、博士の学位の申請があり、これを受けて公正に審査委員が決められ、主査甲元洋子、副査杉野徹・福岡忠雄の三名が審査委員として厳正に審査にあたった。</p> <p>学位申請者、風間未起子は、ハーディ研究の大家、故瀧山季乃同志社女子大学名誉教授より薫陶を受け、大学院在学中よりハーディをはじめとする19世紀小説の分野で優れた研究を続けてきた。同時に小説研究を通してフェミニズムなどに興味を持つようになっていったが、本格的にフェミニズム等の思想背景を基軸にして研究する態勢に入ったのは、1988年の英国在外研究の時からである。申請者は1989年にヨーク大学大学院からMAを授与されている。上記申請論文は、在外研究以後20年余の間に、研究が更に深められ、揺るぎないライフ・ワークとなって結実していることを明示する内容であった。</p> <p>申請論文はA4版ワープロ用紙で249枚。400字詰め原稿用紙に換算して611枚の大作である。主としてブロンテ、ハーディ、ドラブルの三人の作家を取り上げ、それぞれから3作品、合計9作品を選んで論じているが、これら以外の作家や作品も考察の対象にされ、申請者の文学への造詣の深さを示している。英文学を代表する上記の大家たちに関して、申請者は、三人三様の特色を把握した上で、歴史的、文化的な流れの中で作品を分析している。19世紀から20世紀にかけての約100年の時の流れの中で、推移し発展してゆく小説の技法が明らかにされ、フェミニズムの変遷が、新たな生き方を模索するヒロインたちの姿を通して示される。申請者は200冊を越える様々な研究書や資料(186冊の英書と26冊の和書)に丹念に目を通し、先行研究を十分に咀嚼した上で広い視野に立って深く精緻な論を展開している。</p> <p>査読者のうち、英国小説研究の専門家であり、特にハーディ研究の権威である副査、福岡忠雄関西学院大学教授からも、極めて優秀な内容の論文であるとの評価を得た。よって審査委員は全員一致で風間未起子の申請論文に対し、博士(英語英文学)の学位を授与するに値するという結論を得た。</p> | | |

試問結果の要旨

2010年 2月 2日

| | | |
|-------|--------|---|
| 学位申請者 | 風間 未起子 | |
| 審査委員 | 主査 | 甲元 洋子  印 |
| | 副査 | 杉野 徹  印 |
| | 副査 | 福岡 忠雄  印 |

(要旨)

同志社女子大学表象文化学部教授、風間未起子より「イギリスの第一波フェミニズムとヒロインの変遷－ブロンテ、ハーディ、ドラブルを中心に－」という論文を添えて博士の学位の申請があった。これを受けて公正に審査委員が決められ、主査として甲元洋子（同志社女子大学表象文化学部教授）、副査として杉野徹（同志社女子大学表象文化学部特別任用教授）ならびに福岡忠雄（関西学院大学文学部教授）の三名が審査委員として厳正に審査にあたった。各委員はあらかじめ申請論文を十分に査読した後、2月2日に公開の口頭試問会（90分）を開いた。

主査・甲元が学位申請に至る経過を説明し、研究発表・活字論文の本数など、申請に必要な条件を全てクリアしていることを確認した後、申請論文（A4用紙249枚、400字詰め原稿用紙611枚相当）の申請論文について厳正な諮問を行った。

まず甲元が、今後の文学世界におけるフェミニズムの展開について、またフェミニスト作家たちと、一般読者の間におそらく存在するはずの乖離について、特にドラブルの *The Waterfall* に関する釈然としない読後感を取り上げて質問した。

続いて各委員から質問がなされた。まず杉野副査からは全体的な論旨展開や用語、文体に関する所見が述べられた後、性道德の分析について、特に *The Criminal Law Amendment Act* に関連する女性の保護と自由の侵害という表現についての疑義が呈された。また *The Waterfall* という作品の結末に対する疑問が述べられた。福岡副査からは、文言について幾つかの厳しい指摘があり、続いてハーディ作品に的を絞って、内容解釈に関して、あるいは作者自身の思想について鋭い質問が幾つも投げかけられた。

各委員の質問に対する申請者の受け答えは非常に明確でわかりやすく、揺るぎない研究に裏打ちされて説得力に富むものであった。質疑応答を通して、論文には書ききれなかった筆者の知識も披露され、ここに至るまでの着実な研究の過程が自ずと明らかになった。よって3名の審査委員は博士（英語英文学）の学位授与に十分値する論文であるということで意見の一致を見た。